

シリーズ「遺跡を学ぶ」

166

南関東・
弥生時代の
ムラの姿

大塚・歳勝土遺跡

高橋 健

新泉社



南関東・弥生時代の ムラの姿

—大塚・歳勝土遺跡—

高橋 健

【目次】

プロローグ	大塚・歳勝土遺跡とは	4
第1章	環濠集落・大塚遺跡	7
1	ムラの立地と大きさ	7
2	ムラがあった時代	11
3	ムラのかたち	17
4	ムラに住んだ人びと	24
第2章	墓域・歳勝土遺跡	32
1	方形周溝墓とはなにか	32
2	歳勝土遺跡の方形周溝墓	37
3	歳勝土遺跡と大塚遺跡	44
第3章	弥生集落の研究へ	50
1	鶴見川・早濶川流域の弥生時代遺跡	50
2	集落をめぐる議論	58
3	稲作をめぐる問題	63
第4章	発掘から保存まで	70
1	戦後横浜の考古学	70
2	港北ニュータウン遺跡群の調査	78
3	大塚・歳勝土遺跡を残す	84
参考文献		92

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

プロローグ 大塚・歳勝土遺跡とは

ここに二枚の写真がある(図1)。写っているのは、神奈川県横浜市にある大塚・歳勝土遺跡である。大塚・歳勝土遺跡は、横浜市区で稲作がはじまった弥生時代の半ば、いまから二二〇〇年ほど前の遺跡である。集落である大塚遺跡と墓地である歳勝土遺跡がセットで国の史跡に指定されている。大塚遺跡はまわりを大きな溝でかこまれた環濠集落とよばれる集落で、歳勝土遺跡は四角形に溝をめぐらせた方形周溝墓とよばれる墓が集まった墓地である。遺跡の名前は、どちらも旧地名からとったものである。

弥生時代の環濠集落としては、大塚遺跡はけっこう大きくはない。西日本の巨大な環濠集落遺跡とくらべるとかなり小ぶりだし、同程度の規模の環濠集落は周辺に点在している。墓地である歳勝土遺跡についても、規模や副葬品という点ではごくふつうの遺跡だといってよい。

このような「ふつう」の遺跡である大塚・歳勝土遺跡のどこが評価されて国の史跡になったのだろうか？ この遺跡の「価値」は、つぎの三点にまとめることができる。



図1 ● 発掘された大塚・歳勝土遺跡

上：大塚遺跡。1975年11月撮影。大塚遺跡の完掘状況を西側上空からみたところ。大塚遺跡の右上は歳勝土遺跡だが、埋め戻されて畑になっている。見学用にS16号方形周溝墓を露出して残している。

下：歳勝土遺跡。1971年撮影。西側台地の方形周溝墓群を西側上空からみたところ。右上に早濑川がみえる。左端がS16号方形周溝墓。

第一は、大塚遺跡で弥生時代の環濠集落の全体像を示した点である。周囲を溝でかこまれた環濠集落は九州から関東地方まで分布しており、その調査例は関東地方だけでも二〇〇を超えているが、全体が発掘された例は少ない。多くの場合は細切れの発掘成果をつなぎ合わせて全体像を復元しているが、大塚遺跡では台地上の全面を調査した。さらに後世の攪乱をほとんど受けていなかったため、竪穴住居跡や環濠がきわめて良く保存されていた。このため、弥生時代の環濠集落の構造や特徴をつかむことができたのである。

第二は、集落と墓地在がセットでみつかった点である。弥生時代の集落も墓もたくさん調査されているが、両方を全面的に調査し、その関係をとらえることができた例は少ない。大塚・歳勝土遺跡は、集落と墓の関係を明らかにした貴重な例だったのである。

第三は、大塚・歳勝土遺跡が立地する早渕川流域で、同時期の「遺跡群」の全体が調査されたことである。港北ニュータウンの開発に関連して、およそ五キロ四方の範囲で約二〇〇カ所の遺跡が発掘調査された。発掘調査にとりかかる前には開発予定区域内の徹底的な分布調査がおこなわれたため、少なくとも台地上の遺跡についてはほぼすべてを調査したといつてよい。一地域内の遺跡群全体を発掘したことによって、集落相互の関係や移り変わりについての研究を進めることが可能になった。大塚・歳勝土遺跡はその代表格といえる遺跡なのである。

大塚・歳勝土遺跡が発掘調査されてからほぼ五〇年の歳月が流れた。大塚・歳勝土遺跡がどのように発掘調査されたのか、またその成果が考古学研究のうえでどのような役割をはたしてきたのか、ふり返ってみたい。